

## セラピューティックレクリエーション・サービスモデル（AGLモデル）の適応性

茅野宏明（武庫川女子大学）

## ◆緒言◆

昭和53（1978）年、セラピューティックレクリエーション（以下、TR）専攻の代表的な教科書<sup>1)</sup>に初期のLeisure Ability Modelが掲載された。その5年後、昭和58（1983）年NTRS<sup>2)</sup>はこのモデルをTRのサービスモデルとして位置づけた。初期モデルから20年経った平成10（1998）年にTherapeutic Recreation Journal上でいくつかのTRサービスモデルが発表され議論された。そのうち4つのモデル<sup>3)</sup>はすでに日本でも紹介され、種類の現場で参考となっている。

それ以外のモデルに、The Aristotelian Good Life model (AGL)<sup>4)</sup>と Optimizing Lifelong Health Through Therapeutic Recreation (OLH-TR)<sup>5)</sup>がある。前者はアリストテレスの最高善（人間の幸福）を目指すモデル。後者はバルツら (Baltes' and Baltes', 1990)<sup>6)</sup>の成功する老いをテーマにした一生涯健康を目指すモデルで既存のTRサービスモデルの体系を一掃する仮説モデルでもあり、これから臨床での裏付けが期待される。

AGLはアリストテレスの哲学抜きでは理解できないモデルのため、特に『ニコマコス倫理学』を中心に考察を続ける必要があった。筆者は2年ほど前から『ニコマコス倫理学』を通じてアリストテレスの最高善への道のりを考察してきた。その過程で、アリストテレスが説く最高善について、日本文化での応用に役立つ気配が感じられた。

本研究では、AGLモデルの異文化間における適応性について考察することを目的とする。まず、『ニコマコス倫理学』<sup>7)</sup>の「最高善」と「快楽」にポイントを絞って文献調査をし、次にAGLモデルを図説する。そして、異文化圏に属する日本で、関わり方の事例をあげながらその適応例を考察する。他文化で発展したTRサービスのようなソフトを導入し、サービスの質的向上を図るには重要な課題である。

## ◆幸福（最高善）と快楽◆

AGLモデルの基盤となる最高善と快楽についてのポイントが『ニコマコス倫理学』の最後の部分に出てくることを念頭に置き、次のとおりまとめた。

- (1)人間の最終目標は幸福を意味する最高善 (eudaimonia)。
- (2)幸福とは、自分の可能性を実現すること。
- (3)人間の可能性とは、快楽を得ることだけでなく、理性という可能性を花開かせることが人間の幸福。これが人間の魂に固有な形相。
- (4)そのためには人間の徳、つまり中庸こそが大切。
- (5)怯懦と無謀の中庸が勇敢。放埒と無感覚（＝快楽不足）の中庸が節制。けちと放漫の中庸が寛厚。
- (6)皆が快楽と感じる活動もあれば、ある人だけ快楽を感じ、他の人は不快を感じる活動もある。ある人に好ましいとは言えないが、少しの間だけはその人に好ましいといった場合もあり得るもの。
- (7)快楽、幸福、卓越的活動も「質」に属するが、善には属さないもの。
- (8)健康といっても、すべての人が同じ程度の健康を維持しているわけではない。快楽も同様である。また、一人の健康のパロメーターは常に変化するように、健康が失われていきながらもある程度のところまでは健康が保たれる。快楽もまた同じである。
- (9)快楽を大別すると感性による部分と知性による部分がある。

先述の(6)(7)(8)(9)から、AGLモデル（図1）の第一段階（primary goods）に感性的諸快楽を、第二段階（secondary goods）に知性的諸快楽をそれぞれ含めた。

- (10)快楽は活動と密接な関係をもち、活動にも幸福に近いものとそうでないものがあるとされている。AGLモデルの第一段階から第二段階への橋渡しに『必要のための活動』を、

第二段階から最高善への橋渡しに『即自的に望ましき活動』をそれぞれ付記した。

- (11)『事実、遊びが究極目的であるとか、われわれは遊びのために生涯いろいろの面倒や苦難に堪えるのだとかいうことは、おかしい。まことに、およそ何ごとをとってみても、所詮すべては、それ自身とは別の目的のために選ばれているものなのであって、ただ幸福のみがその例外をなす。幸福こそが究極目的なのだからである。遊びのために真剣になり労苦するのは、ばかばかしく、まったく子供じみているように思われる。』(第10巻第6章、1176b、20以下)
- (12)『幸福な生活とは、かえって、卓越性に即しての生活であると考えられる。かかる生活は真剣であり、遊びではない。真剣なことがらは滑稽な遊びめいたことがらよりもよりよきものであるし、また、魂のよりよき部分とか、よりよき人間とか、いずれにしてもよりよきものの活動こそ、よいよき活動なのであるとわれわれは考える。よりよきものの活動は、それだけですでに、よりよき活動であり、より幸福な活動なのである。』(第10巻第6章、1177a以下)
- (13)『アナカルシスの言葉を借りれば、真剣になりうるために遊ぶ、というのがほんとうだと考えられるのである。すなわち、遊びは休息の意味を持つのであり、ひとびとが休息を必要とするのは、連続的に労作することの不可能なるによる。休息が、だから、目的なのではない。活動のために休息がとられるのである。』(第10巻第6章、1176b、30以下)

先述(11)(12)(13)から、AGLモデルの究極が遊び、あるいは自由時間活動の獲得ではないことが理解できる。同時に、TRサービスのユニークな点が自由時間活動に焦点を合わせているだけに、この論点は思慮深い点である。余暇活用能力モデルの究極目的を否定している側面を持つ。

- (14)『すなわち、幸福は、かかる時間つぶしに存せず、既述のごとく、卓越性に即してのもろもろの活動に存しているのである。』(第10巻第6章、1177a、10以下)

この点から察しても、即自的に(自身の存在に即した未発展の段階に)望ましき活動が第二段階から最高善への橋渡しとなることが理解できる。

#### ◆AGLモデルの概要◆

AGLモデルは図1に示すとおり、余暇活用能力モデルや健康維持・健康増進モデル同様に、右上がりの直角三角形を用いて示されている。左から右に向かうに従って次のことがわかる。

- (1)自由や道徳的自己責任の度合いが高まっていく
- (2)TRスペシャリストの役割が変化していく
- (3)3つのステージ(第一段階、第二段階、最高善)がある
- (4)3つのステージをつなぐ活動に①必要のための活動、②即時的に望ましき活動がある
- (5)最高善を観照的(人生の指針となるような人格と深く結びついている)活動と呼ぶ
- (6)TRサービスの対象者の「状態」が明記されている

#### ◆異文化場面への適用例◆

次の3事例をAGLモデルにあてはめて、各々の適応性を考察した。

- (1)高齢者福祉：特別養護老人ホームに入所のA夫さんはリハビリでちぎり絵を始めた。下絵に沿って決められた色の和紙をちぎって貼ることを三ヶ月ほど繰り返す。『うまいわね』『なかなかいいんじゃない』『センスいいね』などと褒められたらうれしい。その後下絵を参考に完成したり、課題を考えて完成したり、仲間と一緒に作品を完成したりと進めていく。現在もリハビリに参加し他の人を手助けしたり、施設内で掲示したりして暮らしている。昨年よりも体力的には落ちているが、作品づくりには支障はない。

☆リハビリに依存しながらもちぎり絵に関しては依存していない状況がわかる。そこには、independentよりもinter-dependentにより自分らしさを獲得している様子が伺える。最高善のステージに属していると考えられる。

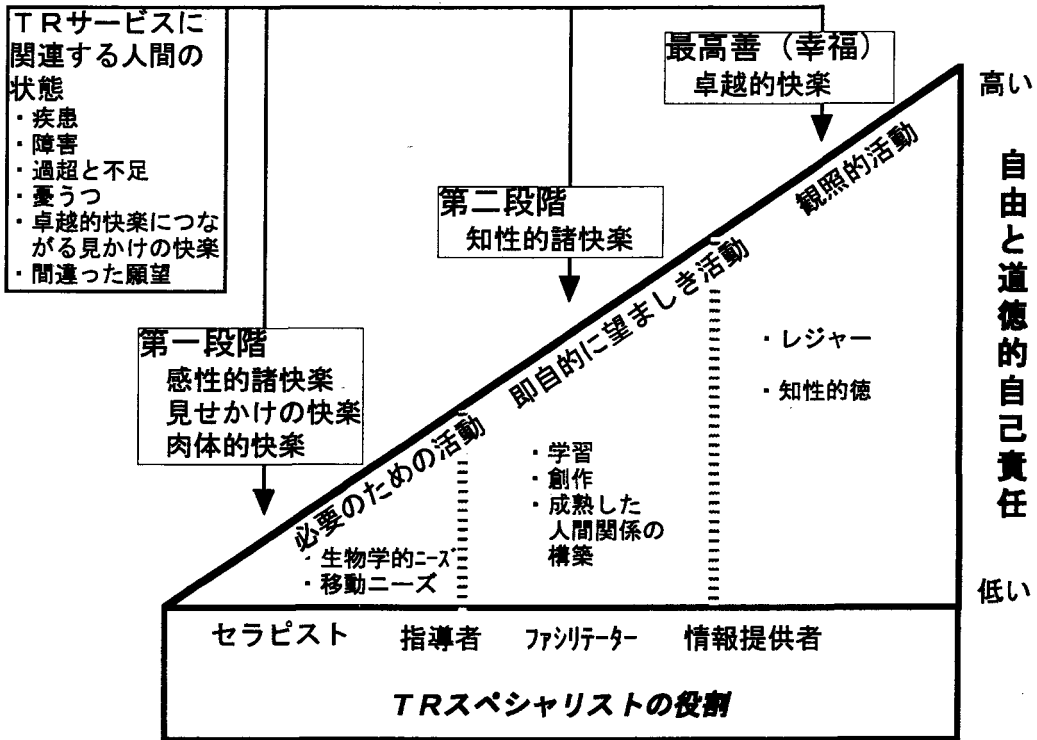


図1 アリストテレスの幸福モデル

Widmer, M.A. & Ellis, G.D.(1998). The Aristotelian Goos Life Model: Integration of Values into Therapeutic Recreation Service Delivery. Therapeutic Recreation Journal, 32(4), 297. FIGURE 1. ARISITOTELIAN GOOD LIFE MODEL. を参照に、茅野が一部加筆修正。

- (2)重度重複障害者：重度脳性麻痺のため全介助で両親と暮らす40歳B太さんは、週2回市内の通所施設に20年近く通う。コミュニケーション困難だが、喜怒哀楽の表現可能。地域で生きることに関心があり、施設のさまざまな取り組みへ天候に関係なく積極的に参加している。特に小学校の校庭で小学生と一緒に花を育てることに夢中になることが行動から理解できる。もちろん、毎回の参加意志はスタッフが確認する。親も子離れを積極的にし、自分たち亡き後も息子が地域で生きていける道を別の角度で支援している。  
 ☆睡眠以外は全介助の日常生活を送る。施設で提供したチャンスに没頭できることがわかり、そのことにスタッフも気づいた。新たな人間形成が構築されつつある。第二段階への到達と言え、今後徐々に最高善へと進むと推測できる。
- (3)精神障害者：デイケアや作業所に通うことが困難なC子さんは、マイペースで作業所附属の工房に通っている。出勤時間やノルマはない。一日に一回は顔を出すことを目標にしている。今は水彩で自由にはがきサイズの用紙に絵を描いている。主に花の絵を中心に。物静かではあるが、見学者が来るとにこやかに対応する。自分の絵を見られるのが恥ずかしく嫌な時期もあったが、今では『どうぞ』といって絵の感想を聞くことが自分にとっては良いらしい。

☆工房が提供できる限られた作業種目の中から水彩に自分の居場所を少し見つけた様子。自由に描いてはいるが、自分がホッとできる活動なのかは未確認。今は第一段階への到達と言え、これからの行動変容に期待したい。

このように、余暇活用能力モデルに準拠できるケースやできないケースも、AGLモデルであれば幅広く網羅できる寛容性が見受けられ、これがAGLモデルの特徴の一つと言える。作業や拘束時間が存在し、その活動の中で自分らしさや自分がホッとできる居場所を見出したと言える。この場合の作業や拘束時間は真の労働ではなく、自分のために必要な活動であるところから出発している。

ディーサー (Dieser, R. B., 2002) <sup>8)</sup>は1998年に発表された各TRサービスモデルについて異文化的観点から考察し、特にAGLモデルは次の3点によってバイアスが少なく指摘した。

- (1)最高善の具体的な行動を不提示 (どんな行動によって最高善かは本人次第)
- (2)理想的な価値観を未想定 (最終的にどんな自立が望ましいのかは万国共通ではない)
- (3)利用者について明確に議論できる余地 (文化的背景だけに依存しない配慮が大切)

このように欧米諸国が定義づけする最終目標がグローバルスタンダードとは言えない点を異文化的に適應するには重要とも指摘している。今後も、異文化的観点をTRサービスの実践研究に盛り込む努力が必要と言える。

#### ◆総括◆

本研究は、AGLモデルの概説を通じて、日本におけるTRサービス対象者の適応性を試みた。アリストテレスによる最高善とTRサービスとの関係を、異文化から考察することは、従来の余暇活用能力モデルを一方では否定しているようにも見受けられる。他方、異文化圏でもバイアスの少ないAGLモデルからは日本の福祉領域における実際の援助活動に近いものをも感じる。

レクリエーションが人間の生き方に関するものである限り、AGLモデルを土台にして再度TRサービスや日本のレクリエーションサービスの目指すところを比較したり、TRサービスと福祉レクリエーション援助の接点を確認しあったり、あるいは別のサービスモデルを考案したりすることが今後必要になろう。レクリエーションサービスに関わる実践者や研究者はもとより、CTRSあるいはTRSが約10名ほど日本国内で活動している現在、多くの実践報告や情報交換の時期が来ていると確信できる。

最後に、AGLモデルを共同開発したEllisは人間のleisureに関する尺度<sup>9)</sup>の開発に携わってきた。その研究者がTRサービスモデルとして余暇活用能力モデルではなく、自らアリストテレスの哲学に沿ったモデルを取り上げたことは注目できる。その意味でも、今後AGLモデルの奥深さにさらに挑戦して深く考察する必要性が感じられる。

#### ◆参考文献◆

- 1) Gunn, S.L. & Peterson, C.A. (1978). Therapeutic recreation program design. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 2) National Therapeutic Recreation Society (全米セラピューティックレクリエーション学会) の総称。
- 3) The Leisure Ability Model; Health Protection / Health Promotion Model; Self-Determination and Enjoyment Enhancement Model; and TR Service Delivery and TR Outcome Modelsの4つ。
- 4) Widmer, M.A. & Ellis, G.D. (1998). The Aristotelian good life model: Integration of values into therapeutic recreation service delivery. Therapeutic Recreation Journal, 32(4), 290-302.
- 5) Wilhite, B., Keller, M.J., & Caldwell, L. (1999). Optimizing lifelong health and well-being: A health enhancing model of therapeutic recreation. Therapeutic Recreation Journal, 33(2), 98-108.
- 6) Baltes, P.B. & Baltes, M.M. (ed.). (1990). Successful Aging: Perspectives from the Behavioral Sciences. NY: Cambridge University Press.
- 7) アリストテレス、高田三郎訳、岩波文庫『ニコマコス倫理学』(上、下)、岩波書店、1973年。
- 8) Dieser, R.B. (2002). A cross-cultural critique of newer therapeutic recreation practice models: The self-determination and enjoyment enhancement model, Aristotelian good life model, and the optimizing lifelong health through therapeutic recreation model. Therapeutic Recreation Journal, 36(4), 352-368.
- 9) Ellis, Gary D. が関わった尺度は余暇生活診断テスト (1992) と Leisure Competence Measure (TRJ, 30(1), 1996) がある。
- 10) ロイド、G. E. R.、川田殖訳、『アリストテレス』、みすず書房、1973年。